

平和と生命の尊さを学ぶ

## 広島平和記念式典派遣事業



1



3



2

1. 原爆ドームの前で被爆者を思う / 2. 式典で犠牲者をしのぶ / 3. ピースクラブによるガイド

## ◇参加者（敬称略）

学校名	学年	名前
伊達中学校	3年	塩澤 紘明
	3年	関川 真佑子
梁川中学校	3年	森 大翔
	3年	岡崎 夕那
松陽中学校	3年	永井 拓真
	3年	大槻 京香
桃陵中学校	2年	小川 慧涉
	2年	遠藤 羅瑠
霊山中学校	2年	菅野 隼
	2年	橋内 南美
月館中学校	3年	齋藤 宇浩
	3年	加藤 愛美

8月5日から7日にかけて、市内中学校の代表生徒12人が広島平和式典派遣事業に参加し、平和学習に取り組みました。

初日は、広島市と（公財）広島平和文化センターが開催している「中・高校生ピースクラブ」から原爆被害の説明などを受けたほか、被爆体験伝承講話を聴講しました。ボランティアの甲斐晶子さんが、被爆者とその家族の半生を語り、生徒たちは命の尊さや平和への願いを語り伝えていくことを決意しました。

2日目は、広島平和記念式典に参列し、恒久平和の実現を願い、原爆死没者に黙とうをささげました。また、平和への願いを込めて、市内各中学校の全校生徒で作成した折り鶴を平和記念公園にある「原爆の子の像」に献呈しました。最終日はグループワークを行い、それぞれに感じ取ったことを述べ、平和への願いについて話し合いました。

生徒たちは今後、今回の経験で学んだことを各校の報告会で発表します。

## 「広島への派遣事業で学んだこと」

## 永井 拓真（松陽中学校3年）



広島への派遣事業は、見るもの触れるものの多くが初めてのもので、自分に鮮烈な印象を与えました。

その中でも特に印象に残ったものは、初日の「被爆体験伝承講話」です。原子爆弾は一瞬のうちにして広島を街を廃墟にしてしまいました。ガラスの破片を一身に受けた人、皮膚がただれて腕からカーテンのように垂れ下がっている人、想像してみると、言葉に表せないほどのむごさでしたが、実際に体験した人は、もっと恐ろしかったのだと思います。また、平和記念資料館では、焼け焦げた服やボロボロになった三輪車を見ました。さらに、戦後も病気や差別に苦しめられている人が今もいるという話を聞きました。原爆はたくさんの人々の命、日常、人権までも奪ってしまう、本当に悲惨極まりないものだということ強く実感しました。

僕たちにできることは、身近な周りの人へ今回学んだことを伝え、広めていくことだと思います。世界に脅威のない、人々が心豊かに暮らせる平和を実現できるよう、少しでも貢献できたらうれしいです。

## 「知ることから世界を平和に」

## 橋内 南美（霊山中学校2年）



広島平和記念式典派遣事業に参加した3日間、原子爆弾の恐ろしさや平和の大切さについて学ぶことができました。

日本はとても平和です。ですが、世界に目を向けてみると、今も戦争は起きています。原子爆弾もなくなっています。地球上には約1万5,300発もの原子爆弾があり、4,000発以上の原子爆弾が、今すぐにも発射できる状態にあります。広島に落とされたりトルボーイの何倍もの破壊力があるものです。

3日間広島で学び、「平和」であることの大切さを知りました。そして、原子爆弾をなくすために何をしたらよいかを改めて考えてみました。私はまず、当時を知ることが大事だと思いました。友人や後輩のほとんどは原子爆弾について詳しく知らないはず。私が今回、広島で学んだことを一人でも多くの人に伝え、世界中を争いのない「平和」なものにできるよう、貢献していきたいと思っています。そして、知った上で何ができるかを考え、実行できるようにしていきたいです。

※感想文は一部要約して掲載しています。